

今、井尻正二に学ぶ

後藤仁敏

2020年10月1日、菅首相が日本学術会議の推薦した105名の会員候補のうち6名の任命を拒否したことが、明らかになった。この事件に接して、私がまず思い出したのは、1949年1月、日本学術会議第1期会員に就任し、「平和声明」を出すなかで活躍していた井尻正二が、同年11月にレッド・パージ（赤狩り）により、国立科学博物館地学科長の職を奪われたことである。

レッド・パージは、連合国軍占領下の日本において、連合国軍最高司令官マッカーサーの指令により政府と企業が、日本共産党員とその支持者を公職追放した弾圧で、民間企業まで含めて4万人以上が失職したのである。

1949年という年は、1月の総選挙で日本共産党が大きく躍進し、10月には中華人民共和国が成立した年で、これを受けてアメリカ軍の占領政策が大きく転換したのだ。1950年には朝鮮戦争が起こり、自衛隊の前身である警察予備隊が設置された。レッド・パージは朝鮮戦争と日本の再軍備への布石であったのだ。

それから65年、2014年に安倍政権は集団的自衛権の行使容認を閣議決定し、15年には安保法制（戦争法）を強行採決し、17年には安倍首相は憲法に自衛隊を明記する改憲案を示し、20年には安倍政治を受け継いだ菅政権が、憲法9条を蹂躪する「敵基地攻撃能力」の保有をめざしている。

安倍政権は、2013年には集団的自衛権を容認させるために「法の番人」といわれる内閣法制局長官の首を挿げ替え、14年には内閣人事局を設けて官僚人事を支配し、政府批判のマス

コミ関係者を番組から追放した。20年には黒川東京高検検事長を検事総長にするために定年延長を閣議決定したが、黒川氏は広範な国民の抗議と賭け麻雀の発覚で辞任した。

菅政権による学術会議会員の任命拒否もこの流れのなかで、政府批判の学者の口を封じるためであることは明らかだ。

新たなファシズムが始まろうとしている今こそ、大正デモクラシーに育ち、戦後民主主義を生きた井尻正二から学ぶことは大きいのではないだろうか。なお、このような特集に対し、特定の科学者を偶像化するものではないかとの批判がある。しかし、今回の特集は、井尻の生き方や研究方法を丁寧に実証的に紹介することにより、むしろ井尻を偶像化させないことに貢献するものと期待している。科学者の生き方もまた、科学の対象なのである。

本特集では、まず井尻がもっとも力を注いだ地学団体研究会の歩みと現状分析について、斉藤・金井・小林の論文で解説した。近藤論文では、井尻の名を広く社会に広めた野尻湖発掘への貢献を紹介した。続いて後藤論文は、井尻の否定的人生が否定的精神を育んだとの観点から、彼の生涯と業績を概説した。最後に原論文は、斎藤公子の保育論に与えた井尻の影響について述べている。

21世紀に生きる私たちが、20世紀に生きた井尻正二の生き方と研究の歩みから学ぶことは意義深いだろう。

（ごとう・まさとし：神奈川支部、
古生物学・解剖学）